実践活動報告書

瀬戸稔彦（仙台国際日本語学校）

①課題

研修開始前に設定した課題を８月の夏期研修前に修正し、その後は以下の内容が本研修における課題となった。

❶勤務校主催の外国につながる児童・生徒に対する学習支援教室は、新型コロナウィルスの影響を機に、2019 年冬を最後に現在休止中である。これを再開させること、またこれまでは勤務する日本語学校の人・モノ・場所を主な資源として運営してきたが、それらを拡大させ、参加者や支援の裾野を広げるとともに、内容もより充実させたものにすることが課題である。

❷上記❶の教室の休止期間中に、主体となる学校の内部、地域の他機関の動き、社会情勢等が変化した。❶の実現及び新たな支援の形を創るため、他の機関とより密接な連携・協働ができないかと考えている。

②解決のための取組み

その解決のため、まずは所属校において上記の教室の再開を提案してみたものの、現在の体制（学生数や新任教員の割合など）を主な理由に、今年度中の再開は難しいだろうとの結論に至った。

そこで今年度は、他機関の活動に連携・協力する形で外国につながる子どもたちの支援に関われないかと考え、宮城教育大学と仙台観光国際協会が運営する「日本語を母語としない小・中学生のためのオンライン教室」へ見学を打診、昨年11月18日に見学者としてではなく支援者として関わることができ、他機関の運営や教室の様子を垣間見ることができた。またオンラインの力やその短所についても再確認することもでき、所属校での取り組みが相対化もされたことで、今後に繋がる得難い機会になったと感じている。同教室はすでに閉講しているが、来年度以降も開催されるようであれば、本務との兼ね合いもあるが見学・協力などができればと考えている。

③本研修期間中に考えたこと（とその変遷）

東京中央日本語学院と江戸川区の事例を目にし、刺激を受けると同時に自身の活動エリアを含む他地域でも同様のことが展開できるのではないかと感じた。しかしながら、この事例の東京中央日本語学院にしても、上記の教室における宮城教育大学にしても、支援される側のみならず支援する側にもメリットがあることが共通しており、所属校の取り組みにはこの「支援する側への（短期的でわかりやすい）メリット（の提示）」が欠けていると気付くことができた。

また所属校におけるこれまでの教室運営や、自身の子育てや在住地域との関わりから、一時、外国につながる子どもたちへの支援においては「日本語教育の専門性＜子どもと接する際の技術」という図式が強くなり、所属校で支援を行う／行ってきた意義を見失いかけたが、秋期研修で他の研修生からのフィードバックを受け「日本語教育の専門性＋子どもと接する技術」と修正されたことは非常に大きいと感じている。

さらに機構の菊池さんより「学校と地域社会の関係が希薄であるという認識があると見受けられました。だとすると、課題設定として、「小・中学生のための〇〇日本語教室」の拡充も確かに考えられますが、それ以外のプログラム企画・実施も検討しても良いように思いました」とのコメントをいただいたことで、自身の中にあった靄が晴れ、今後の展開に拡がりを見出すこともできた。

③地域日本語教育コーディネーターとして

同期型の研修とオンデマンド配信での講義から、地域日本語教育コーディネーターとはどのような役割を担い、そのためにはどのような能力や資質が求められるのかについて、その像が徐々に具体的になってきたように感じている。

それを踏まえて、現在の自身には「調整・交渉能力」（講義６、スライド№14）と「対人関係を築く能力」（講義５、スライド№５）にやや課題があるように感じた。

また夏期研修でお話を伺った、地球っ子グループの芳賀さんの「０か１かではなく小数点で物事捉える」、「自分自身が多様性のある人間になる」といったお言葉が、地域日本語教育コーディネーターとしてだけではなく、多様性の時代の中に生きる者としても非常に重要であるだろうとも感じている。

④研修の振り返りと今後について

結果的には、本研修期間内に課題を解決するには至らなかった。もしかしたら、客観的に見れば研修の前後で何も変化がないように見えるかもしれない。しかし、ここまで書いてきた通り、自身の思考やこれまでの取り組みの捉え方に変化が生じ、また今後の展開などに対しては大変大きな影響を与え得るのではないかという予感がある。

また少し引いた目線からは、自身がこの研修に参加したこと自体が周囲に何らかの影響を与えており、一定の意味が（場合によっては事後的に）付与されるのではないだろうかとも思う。

加えて、研修を通して（再）学習した知識や情報、他の研修生らの実践や内情を知れたこと、また様々な方々と関わり繋がりが持てたことは、あるいは課題解決以上の成果とも言えるのではないかと感じている。

今後、本研修における課題の文脈では、所属校における外国につながる子どもたちへの支援活動の再開を視野に入れつつも、それに固執することなく、より地域に貢献できる学校に、個人になっていければと考えている。